

大黒屋禁煙一号店

佐伯は、黒田の手腕に感心していた。大黒屋は、渋谷に完全禁煙の居酒屋第一号店を開店するということを大々的にマスコミに宣伝した。チェーン店最初の試みという。新聞記者には喫煙者が多いので、揶揄的な記事も多かったが、多くのマスコミは黒田の試みを好意的に紹介した。

通常であれば、居酒屋が開店するといっても、マスコミはまったく報道しない。しかし、業界初ということもあって、禁煙居酒屋の誕生は、あらゆるマスコミが取り上げてくれた。大黒屋は期せずして、自分の店の宣伝を、まったく金を払わずに、実現できたことになる。しかも表には出ていないが、NTSが、喫煙所の設置費用を負担しているのだ。

そして、佐伯は、榎藤の人を見る目の高さにも感心していた。もし、黒田ではなく、他の経営者のところに、今回の話を持っていったら、おそらく実現しなかったであろう。即断即決の若い経営者だからこそ為しえた快挙である。

佐伯は、榎藤からの指示で、開店四日目に店の視察に訪れた。驚いたことに、店の前には、客が列を成している。佐伯は、その後ろに並んだ。佐伯の前に並んでいるのは若いアベックである。男は、髪を金髪に染め、耳にピアスをはめている。女は、見たこともないような化粧をしている。街であつたら、できれば避けたいカップルである。しかし、こんなカップルでも、禁煙の居酒屋に来るのだ。佐伯は、不思議な感慨に襲われた。

ふと見ると、男の胸ポケットにはタバコの箱が納まっている。なんだ、喫煙者じゃないか。佐伯は驚いた。喫煙者がどうして、禁煙居酒屋に来ているのだろうか。佐伯は、急に興味を覚えた。勇気を出して聞くことにした。

「すみません。ちょっとお伺いしたいことがあるのですが、よろしいでしょうか？」

ふたりは一瞬、自分たちが話しかけられているとは気づかなかったようだ。回りを見渡した後、自分の胸に指をさして、俺のことかと聞いている。

佐伯はうなずいて、こんなことを聞いた。

「おにいさんはタバコを吸いますよね」

「ああ、吸うよ」

男はぶっきらぼうな応えを返した。ただし、佐伯のことを無視する気はないらしい。

「それなのに、どうして禁煙居酒屋なんかに来られたのですか？」

すると、男はこともなげに応えた。

「だって、他人の煙を吸うなんていやじゃん。それに、こいつ妊娠してしまったんだよ。副流煙って、おなかの子供にはよくないらしいよ」

と驚くことを言った。

佐伯は

「そうですか。奥様が妊娠していらっしゃるんですか？」

そう言うと、山姥のような化粧をした女は、けたけたと笑った。

「いやだ。奥様だって、良治、いっそのこと結婚しない」

「そうだな。おなかの子のためにも籍を入れるか？」

佐伯は、自分が声をかけたことで思わぬ展開になっていることに驚いた。

すると女の子が言った。

「そうだ。これも何かの縁よ。おじさん、私たちの仲人になってくれない？」

男も同調した。

「それはいい。おじさん。お願いします」

佐伯はためらった。

「だけど、ふたりのご両親の了解も必要でしょう。ここで、簡単に決められる事ではないのではありませんか」

「俺は、二十五だし、こいつも二〇歳だから、自分達で決められるはずだよ」

「分かりました。仲人になる件は、少し考えさせて下さい。ただ、ここで会ったのも何かの縁です。今日はおふたりにご馳走させていただきませんか。ささやかなお祝いです」

ふたりは

「やったー！」

と素直に喜んでいる。

佐伯はふたりと一緒に席に案内された。席はゆったりとしていて、この種の居酒屋にしては贅沢な配置となっている。料理もよく洗練されている。ひょんなことから出遭った三人は自己紹介をした。

「俺は、吉田良治、ミュージシャン志望だけど、いまは、喫茶店でアルバイトをしているんだ」

「私は、田辺亜美。わたしもミュージシャン志望だけど、いまは、スーパーのレジでアルバイトしているの」

スーパーのレジ？佐伯は、こんな化粧では、それは無理だろうと思った。それを察したのか亜美は

「おじさん、いま、私の化粧を見て、レジなんか勤まらないと思ったでしょう。これは、ステージ用の化粧よ。いま、ふたりでロックカフェでステージをこなしてきたところなの。その打ち上げってわけ」

佐伯は納得した。ふたりの格好はステージ衣装なのだ。佐伯はふたりに名刺を渡した。

「へー、NTSって、あの有名なタバコ会社でしょ。おじさん、社長室長なんだ。でも、タバコ会社のひとが何で、禁煙居酒屋なんかに来ているの」

と亜美は聞いた。そして

「ああ分かった。敵状視察でしょう。こんな店はつぶそうと思っているんだ」

佐伯は、どう言おうか迷ったが、ふたりには正直に話した。

「それは誤解ですよ。実は、禁煙居酒屋のアイデアは、うちの社長が出したことなんです」
「なんか、それって嘘っぽい。どうしてタバコ屋の社長が、そんなことを提案するの？」

佐伯は、ふたりに事情を説明した。

良治は

「それっていいアイデアかもしれないな。喫煙しているやつは、結構、他人の煙には迷惑しているんだけど、表立って言えないところがあるんだ。だって、やだろ。人が飯食っている横でタバコを吹かされちゃ。店を禁煙にして、吸いたいやつが喫煙所に行く。俺は、その方がいいな」

見ると、良治はチューハイだが、亜美はウーロン茶にしている。佐伯の視線に気づいたのか

「最近、お酒はやめたんだ。お腹の子供のためにね」

「そうか、偉いんだね」

佐伯は感心した。こんな若い連中でも、自分たちの身体を気にするなら、確かに、この店は成功かもしれない。

「ステージも今日でおしまい。だから打ち上げなの。他のメンバーも来るっていったけど、断った。だって、あいつら、みんなヘビースモーカーなんだもん」

「しかし、スーパーのレジのバイトも大変だね」

「そうなの。あれって、立ち続けでしょう。たぶん、もうすぐ耐えられなくなる。すぐにやめなきゃいけないと思ってます」

良治は、タバコを吸いに席をたった。胸ポケットのタバコを指でさし、ふたりにごめんとわびている。

どうやら、恋人や生まれてくる子供のことは気にかけていても、禁煙とまではいかないようだ。

「良治って、中学校の頃からタバコをやっているから、絶対タバコなしでは暮らせないみたい」

と亜美は言った。

「ところで、おじさん。おじさんの会社でバイトを雇っていない。私って、商業高校だから、簿記二級の資格も持っているんだよ」

「へー、そうなんだ」

佐伯は、そういえば、経理部でひとを欲しがっていることを思い出した。半年程度しか働けないだろうが、何とかなるかもしれない。

「少し、あたってみてもいいよ。時間のある時に、僕を尋ねてきてくれるかい」

「本当。期待していい？」

亜美は目を輝かしている。佐伯は思った。今日が一種の面接なようなものだ。この子は、悪い子には見えない。

すると、良治が帰ってきた。一瞬、タバコのいやな匂いが鼻をつく。排煙設備が完備し

ていても、身体に匂いがつくことは防げないようだ。

「良治。佐伯さんが仕事を紹介してくれるかもしれないって」

すると、良治はまじめな顔になって、立ち上がった。

「佐伯さん。私からもお願いします。亜美をスーパーのレジに立たしておくのは可愛そうなんです」

そういうと深々と頭を下げた。

佐伯は、ふたりにできるだけことはすると約束した。それから、三人は、とりとめもない話をした。久しぶりに若いひとと話ができて、佐伯は若返った気がした。

権藤の本音

佐伯は大黒屋の様子を権藤に報告した。

「そうか、喫煙者も店に来ていたか。それは成功だな」

「ええ、私も少しびっくりしました。でも、複数で飲みに行く時は、喫煙者がいる確率は高いですから、どうしても受動喫煙にあう危険性が高くなります。喫煙所つきの禁煙居酒屋ならば、その心配はありません。それに、喫煙者の中にもまわりに気を使うひとがいるようですから、今回のような店は将来性があるかもしれません」

「NTSにとっても、ありがたい話かもしれないな。なにしろ、タバコの煙をいやがるひとは、喫煙者だけでなく、NTSをも目の敵にしているようだからな」

そこへ、品川が入ってきた。佐伯は、どうして品川がここに来たのかといふかった。社長からは、何も聞いていない。

品川は、息を切らしている。

「社長が、急用で私を呼び出しているということを秘書から聞きまして、あわてて外出先から帰社しました」

権藤は

「品川君。忙しいところを申し訳なかった。実は、今日はふたりに聞いてもらいたいことがあって、呼び出した」

権藤が言うふたりには佐伯も入っているようだが、どんな話なのだろうか。

「そろそろ、私の退任時期も近づいている。あまり急な話では、対策もとれないから、ここで、私の考えをはっきりさせておいた方がいいだろうと思って、時間をとってもらった」

佐伯は、すでに権藤の意向は承知している。もう一期、権藤が社長を務め、後任を社内から指名する。そのための改革も着々と進めてきている。

ところが、権藤は驚くべきことを言った。

「私は、今期限りで引退するつもりだ」

「何ですって！」

佐伯と品川は、同時に声を出していた。

「それは、社長が会長に退くといことですか」

佐伯は聞いた。

「いや、N T S からきれいさっぱり身を引くという意味だよ」

「そんな。社長のおかげで、ようやく改革が進みだしたところですよ。いまさら、逃げるなんてそんなことは許されません」

「佐伯君は、面白いことを言うな」

品川は落ち着いた声で間に入った。

「社長、社内の体制はどうするのですか。社長のリーダーシップで、ようやくまとまりかけているのですよ」

「まあ、ふたりともそう慌てるな。私の話も聞いて欲しい」

佐伯は、権藤の真意が分からなかった。ここまで、改革を進めてきた。そして、ようやく、N T S の将来像が見えたよう気がしていたからだ。実は、佐伯自身も、N T S の将来には不安を抱いていた。いずれ、タバコは政府から禁止される時代がくるかもしれない。しかし、最近の権藤の動きをみていて、決して悲観することはないと思うようになっていたのだ。

確かに、財産省からの天下りを断ったと聞いた時は、権藤の体のよい自分の地位の延命策かもしれないと思ったこともある。しかし、最近は、権藤こそがN T S 社長の地位にふさわしいと思うようになっている。

「私が今期限りで引退することは、就任当初から決めていたことだ」

と権藤は言った。

「それなら、なんで財産省からの天下りを断ったかということだろう。もう、そんな時代じゃない。それに、生え抜きでいい人材も育てている。それに、順序からいくと、私の後に来るのは金井という男だ。それこそ、N T S を潰しかねないバカものだ。だから、天下り拒否は一石二鳥なんだよ」

佐伯は、食い下がった。

「しかし、その宣言で、多くのひとは社長がもう一期務めると思ったのではないのでしょうか？」

「確かに、それを否定しなかったのは事実だ。君らはレイムダックという言葉を知っているか。二期目の大統領のことを、アメリカではこう呼んでいる。そう、もう大統領に再選されることはない。だから、求心力もないので、誰も言うことを聞かなくなる。私が、もし今期限りと宣言していたら、誰も私の言うことは聞かんだろう。だから、続投の件は、否定しないできたんだ」

品川も食い下がった。

「それならば、続投が妥当ではないですか。正直言って、最初は、権藤社長にはわれわれ社員もアレルギーがありました。しかし、いまでは、若手を中心に、社長の手腕を高く評価しております」

「そう言ってくれるのはうれしいが、そうもいかない事情がある。いいか、財産省の天下りを拒否したということは、財産省にけんかを売ったことになる。役人の世界は、実に陰険な体質がある。建設的な政策には疎いが、他人のじゃまやいじめとなると天才的な能力を発揮する。俺が社長の間はいいかもしれないが、その後が大変になる」

「それは、分かりますが、それと、社長の退任とどんな関係があるのでしょうか」

佐伯は聞いた。

「いいか。私が続投したら財産省はどう思う。あいつは、自分の地位の延命のために、天下り拒否という行動に出たと思うだろう。事実がそうではなくとも、必ず、私恨を残すことになる」

「しかし、社長が改革を進めれば、世間も納得するのではないですか？」

「役人の世界は、そんな単純なものではない」

品川は言った。

「ですが、社長。たとえ、社長がおやめになっても私恨は残るのではないですか？」

「ああ、そのための布石も打ってある。それは、次期社長にお願いすることだが」

佐伯も品川も、自分たちがまったく予想していなかった方向に事態が進んでいくことに戸惑いを隠せない。

「しかし、社長。次期社長は誰を指名なさるおつもりですか。社長の後任は、かなりの重責をになうことになります。そんな人材は、わが社にはおりません」

品川はきっぱりと言った。佐伯も同感だった。

権藤はふたりを見て笑った。

「ちゃんと人材はいるじゃないか。品川君。君だよ。君に次期社長をやってもらいたい。今日は、引導を渡すために君を呼んだ」

品川は驚いている。

「社長。それは無理です。わたしには荷が重過ぎます。それに、まだ五十八の私では、社内の反発も強いでしょう」

権藤は、それを無視して佐伯を見た。

「佐伯君。君はどう思う」

「確かに、品川専務はお若いですが、社内の人材と云ったら、専務以外には考えられませんか」

「ほら、佐伯君のお墨付きだ」

品川はうーんと唸っている。

「これからのNTSは、若いひとが次代をになっていくべきだ。もちろん、厳しい船出だろうが、公社時代から、この会社を引っ張ってきた人でなければ、この苦境は乗り越えられない」

品川に野心がないと言え、嘘になる。いずれは、この会社のトップになることを夢見たこともある。

しかし、NTSは、完全に財産省の支配下にある。社長はすべて財産省からの天下りで、自分にはトップになる目はない。そう思いこんでいた。それに、自分はまだ若い。

そんな時、権藤という強烈なリーダーシップを持つ社長が現れた。しかも、権藤は財産省支配を終わらせると宣言している。品川は、この人のもとで修行をつめば、将来、自分にもチャンスがあるかもしれないと思っていた。ただし、それは、権藤の下で修行をつむという前提である。

「いいか、品川君。人生には、そんなにチャンスが転がっているわけではない。いまが、君にとっての数少ないチャンスの時だ。それに、君だけに重責を負わせるつもりはない。横にいる佐伯君に君の右腕になってもらう」

佐伯は思った。もともと社長室長はもう一期務める予定であった。品川に仕えるのも悪くはない。すると権藤は驚くことを言った。

「佐伯君には常務取締役として、企画部門を見てもらうつもりだ。研究所も担当してもらう」佐伯は思わず叫んでいた。

「それは、無理です。社長。冗談はよして下さい」

「なにが冗談なもんか。佐伯君は、この三年間、私の横で、私のやり方をずっと見てきたはずだ。君以外にいないんだよ。品川君をサポートできるのは」

「しかし、自分はまだ、若すぎます。社内の反発は品川社長以上でしょう。これでは、組織の秩序が乱れます」

「秩序ではなく、旧壁を打破するんだ。それでなければ、NTSの将来はない」

佐伯は、頭の中が混乱していた。あまりにも突拍子のないことが、権藤の口から立て続けに出てくるからだ。自分が常務。そんなことはありえない。

権藤は品川の方を見た。

「品川君はどう思う？」

すると、品川は

「確かに私ひとりでは荷が重いですが、佐伯君との二人三脚ならば、何とかなると思いますが」

「専務！」

佐伯は悲鳴を上げていた。どうやら、品川は腹をくくったようだ。

「年寄りの始末は俺がつける。もうすでに、彼らの転出先は用意している。彼らとて、異存はないだろう。もともと、彼らは腰ぎんちゃくで、NTSの将来像などもっていない。難破船から逃げ出せると喜んでいるんじゃないか」

佐伯は、完全には、納得していなかったが、ここは、一応承諾したようなふりをして、今後のことを相談することにした。

「いちばんの問題は財産省対策だ。面子をつぶされたと思っているだろうからな。そこで、提案なんだが、NTS子会社の副社長ポストを三つほど用意して欲しい」

「副社長ポストですか？」

「ああ、それでいい。副社長なら、不満もないだろう。いま、役人は天下り先の確保に四苦八苦しておる。そのひとつを失ったとしても、新たに三つも確保できるならば、彼らも大喜びだろう」

「しかし、どうすれば先方と交渉できますか？」

「官房長をしている吉本は、わたしの後輩だ。次期社長の了解が得られれば、こちらから話をつけておく」

「それならば、私に異存はありません」

佐伯は、いつのまにか、権藤が書いたシナリオの上で、自分も品川も踊らされているのに気づいた。しかし、本当にこれでいいのだろうか。いや、それよりも、将来のNTSを本当に支えていけるのだろうか。

亜美の採用

佐伯は、まだ茫然としていた。先ほどまで社長室で話していたことが信じられないのだ。権藤は行動がはやい。これから、財産省と連絡をとるといふ。この件には、佐伯君は関わらない方がいいということで、社長は単独行動をとるようだ。

久しぶりに、社長の世話から解放されて、佐伯は、社内をまわってみるとことにした。企画部門をみるとすれば、これからは忙しくなる。本当に、そんな大役が自分に務まるのだろうか。

佐伯は、頭を冷やすために、外に出てみた。すでに、秋も深まり、冬が近づいている。外は冷氣につつまれていた。この三年からはめまぐるしく過ぎていった。季節を味わう余裕などなかった。しかし、権藤社長のもとで働いたことは、本当にいい経験になった。

ふと見ると、若い女性が佐伯の方を見ている。会ったことのない女性だ。清潔そうな外見である。NTSに何か用があるのだろうか。女性は、迷ったようにしていたが、佐伯のもとに掛けてきた。

「あの一、佐伯さんですよ？」

佐伯は驚いた。この子は自分のことを知っている。

「はい、そうですが、あなたはどちら様ですか？」

と聞いた。すると

「田辺です。お忘れですか？」

と自己紹介された。佐伯には田辺という名前に心当たりはない。すると

「田辺亜美です。亜美ですよ。昨日一緒に飲んだじゃないですか？」

「えっ！あなた亜美ちゃん！」

佐伯は驚いた。印象がまったく違っていたからだ。昨日は、かなり厚い化粧で顔を覆っていた。今日は、清楚なお嬢様という印象である。こんなに素顔がきれいなのに、どうしてあんな化粧をするのだろうか。

「ごめん。あまり、印象が違うんでまったく気づかなかった」

「こちらこそ、ごめんなさい。昨日の今日では、すこしずうずうしいかと思ったんですが、良治が相談してこいっていうものですから、スーパーは休みをとりました」

そう言えば、アルバイトのことを言っていた。自分も酔った勢いで、安請け合いしたかもしれない。

「迷惑でしたか。ここまで来たんですけど、なかなか勇気がでなくて、玄関の前を行ったりきたりしていたら、ちょうど佐伯さんが出てこられたので、思い切って話しかけました」

「いや、そんなことはない。とりあえず、応接室を準備するから、一緒に来てくれるかい」

受付嬢は、興味津々という顔で亜美のことを見ている。佐伯は、何か勘違いされなければいいなと思った。

応接室に通すと、亜美は丁寧な挨拶をした。昨日とは、まるで別人である。

「佐伯さんが、こんなに偉い方とは知らず、昨日は失礼しました。しかも、今日は、あつかましく出てきたというのに、門前払いにならず、ほっとしています」

亜美は、履歴書を持ってきていた。確かに商業高校を出て、簿記二級の資格を持っている。そろばんも三段とある。

「すごいね。そろばんは三段なんだ」

「ええ、小さい頃からしごかれましたから。でも、いまは電卓が主流ですから、あまり役には立たないでしょうけど」

「そんなことはないよ。そろばんの得意なひとは暗算ができるからね。結構、重宝するもんだよ」

「そうですか」

亜美の顔が少し明るくなった。こんな子が職場にいれば、雰囲気が変わるかもしれないなと佐伯は思った。しかし、昨日のロック姿からは想像がつかない。

「ところで、ご両親はどう思っているの？」

履歴書によると、亜美の両親は、福島に住んでいる。娘のことは心配しているに違いない。しかも、亜美は東京の大学を中退している。

「私が勝手に大学を止めたことで、父親はかんかんです。母は理解してくれているんですけど、音楽をやることには反対でした」

「そうか」

佐伯は、気にしていることを聞いた。

「良治君とのことは、ご両親には話しているの？」

「ええ、母には話しました。子供ができたといったら、あなたって子とはあきれかえっていました」

佐伯は悩んでいた。確かに、亜美は成人であるが、親には連絡しておいた方が良い。NTSという会社の立場もある。

「今日のところは、これで帰っていいよ。採用できるかどうかは明日にでも連絡できると思う」

亜美はよろしくお願ひしますと言って、帰っていった。

佐伯は思った。亜美はいい子だ。おそらく、自分が推薦すれば、アルバイトとして、すぐに採用してもらえらるだろう。しかし、両親の了解をとったほうがよい。

佐伯は、亜美の実家に電話をかけた。NTSの社長室長と名乗ると、亜美の母親は、とても驚いた。佐伯が事情を話すと、亜美の妊娠のことは、すでに父親にも伝わっているという。最初は、荒れ狂っていた父であったが、亜美が子供を生むと聞いて、最近はふたりの仲を認めざるを得ないと思っているようだ。

亜美の母親は、佐伯に何度も感謝した。そして、亜美のことをよろしくお願ひしますと言った。これで、障害はなくなった。佐伯は、さっそく経理部長を呼んだ。

「佐伯さんの紹介なら、こちらは問題ありません。ひとがいなくて困っていたところですからね。半年でも大助かりです。それと、お子さんがいるなら、無理はしないように気をつけますよ」

と言ってくれた。採用が決まったことを亜美に話すと、本当に喜んでくれた。

権藤発案の禁煙居酒屋がきっかけで、思わぬつきあひをすることになったが、これも何かの縁であろう。いまは、ふたりに丈夫な赤ちゃんが生まれることを祈るばかりである。